

走れ思い出

山線軌道

》5《

千歳鉱山の操業が活発になつて、金鉱石を運ぶ列車の本数が増えると、上りと下りの列車がすれ違つた

運行状況

×モ 昭和十一年から繁忙期を迎え、夏七往復、冬五往復。同十二年の運行表にすると吉小牧発は午前六時半、同八時十五分、同九時三十五分、同十一時、午後一時、同二時二十分、同三時四十分。第一発電所発は午前八時六分、午後五時半、湖畔発が午前九時半、同十時五十分、午後零時五十三分、同一時十五分、同三時二十五分、同四時五十分。所要時間は吉小牧から湖畔まで一時間四十五分、湖畔から吉小牧まで一時間二十五分前後。

除雪に苦勞した6哩の生活

飲み水は機関車から

で使い、寝泊まりしてしまふ。その頃の線路工事に佐羽内さんらがおられましたが、線路工事の人たちは「王子製紙」の名前が入ったハンテンを着ていました。

六マイルでの生活は、もちろん電気などありません。水場がなかったのです。

全部除雪してしまつてもよい。とにはもどれない。というのも、バックすると逆に開くかっこうのスカートが雪を集めてひっかかるのです。それで昭和十九年頃にはブルドーザーが導入されました。

め、六マイルを複線にしたのです。駅舎をつくり、私は初代の六マイルの駅長となりました。昭和十二年のことです。

朝に列車が来るとみんなで機関車の水タンクからバケツで水を汲み出し、タルの中にためておくのです。汲み出してしまつと機関車が走れなくなつてしまつので、気を使いました。

冬は除雪が大変でした。積雪が五センチを超えたら機関車はハネて走りますが、

送を委託されていたので、雪で列車が止まると、駅員がスキーをはいて郵便物を持ち、支笏湖へと向かいます。支笏湖畔からも駅員がこちらに向かい、十マイル付近で落ち合いました。



版画・能登正智さん(吉小牧市糸井389-9)

山線は当時、郵便物の輸

吉小牧市美園町三ノ三 嘉屋一雄さんご談